

指先まで愛して  
くオネエな彼の溺愛警報く

# 目次

指先まで愛して　　～オネエな彼の溺愛警報～

第一章	ハーデンベルギア	～運命的な出会い～	4
第二章	ガーベラ	～常に前進～	18
第三章	ヘメロカリス	～苦しみからの解放～	38
第四章	クローバー	～私のものになって～	87
第五章	ブバルディア	～夢～	125
第六章	カルミア	～大きな希望～	178
第七章	ウイステリア	～決して離れない～	229

第一章 ハーデンベルギア（運命的な出会い）

冷たい空気に身体が縮こまる季節。

鼻がツンとして息をするたびに痛くなり、マフラーに隠れない耳が真っ赤になる。

そんな冬も本番になってきた一月の中旬。楠沢紗雪は、往來の激しい街の中を歩いていた。

終電も近いこの時間、電車に乗る人々は、急ぎ足で駅へ向かっている。

けれど紗雪は急ぐこともなく、いつも同じ足取りだ。それは、一種の諦めからくるものだった。

今の会社に入社して、もう四年目。誕生日も過ぎ、紗雪は二十六歳になっていた。

普通そのくらいの年頃の女性は、仕事もプライベートも充実し、身なりにも気をつけている。

けれど仕事帰りのはずの彼女は、近くのコンビニへ行くような姿だ。

美容院に行けず伸びっぱなしの黒い髪は、手入れの悪さを隠すために黒いゴムで一つに纏め、顔

はかろうじて日焼け止めを塗っているだけで、ほとんどすっぴんに近い。

彼女の肌は青白く、けして健康的には見えなかった。

着ているコートは数年前に流行したもの。

首に巻いているマフラーは、大学生時代から愛用し続けているもので、少しほつれている。スー

ツを着ているのに、足下は運動靴。それもかかどがすり減っていて、いいかげん買い換えなければならぬくらい使い古している。

やがて来た満員電車に乗った紗雪は、ぼんやりと外を眺めた。

窓ガラスに映る自分の姿に泣きたくなり、現実逃避するようにマフラーで鼻を覆う。そして、目を伏せた。

そうしているうちに、三十分ほどで電車が最寄り駅に着く。

彼女は、駅前にある二十四時間スーパードで売れ残りのお弁当を買い、そこから十分くらいの距離にあるマンションへ帰った。

テーブルの上に無造作にお弁当を置き、お茶と一緒に夕食をとる。そしてシャワーを浴びてベッドの上に寝転がった。

一人で住むには少し広いこの部屋にいと、余計に孤独感が押し寄せてくる。会社においても自宅においても息苦しくて、どうやって呼吸をすればいいのかわからない。

何社も採用試験を受けて、圧迫面接と不採用通知の山に心を折られ、それでも笑顔を貼りつけて就職したのが、今の会社だ。IT系のその会社に、紗雪は営業事務として入った。

これで自立ができ、両親にも安心してもらえると思っていた。

最初の半年は大変だけれどやりがいがあると感じていた。だが、一年も経つと、会社の異常さに気がつく。

紗雪が働いている会社は、簡単に言ってしまうえばブラック会社だ。

仕事は始発から終電まで続き、サービス残業は当たり前で、土日も休みが減多にない。ほとんど三百六十五日毎日働いている。

当然、二年ほど前に会社を辞めようと思いい、上司に相談した。だが、辞めるためには専用のフオーマットが必要だと言われる。それが欲しいと頼んでも、彼は一向にフオーマットをくれない。いつの間にか同期が何人も来なくなった。噂では、彼らが出社しなくなったあと、会社の人間に自宅まで押しかけられたとか、近所に悪質なデマを流されそこに住めなくなったなどと聞く。それが嘘か本当かはわからないけれど、結局、同期とは連絡がとれず、恐怖だけが残っている。

それに、どうにかしなきゃいけないと考えられていたのは最初だけだった。始発から終電まで昼休憩もほとんどとれずに働いているうちに、思考は停止していく。自宅に帰ってからは眠るだけ。その睡眠も短いもの。慢性の睡眠不足だ。

紗雪は、自分がまるでボールペンみたいだと思う。

ガリガリ削られ、インクがなくなったら捨てられる。そして別のインクという名の人が新しいボールペンになるのだ。

もうすぐ自分のインクはなくなる気がする。

その時残るのはなんだろうか？

そこまで考えて、彼女は息を深く吐き出して立ち上がり、キッチンへ向かった。長年愛用しているティーポットとティーカップを取り出して、ケトルでお湯を沸かす。

彼女の唯一の趣味は紅茶を淹れることだ。

どれだけ忙しくても、この習慣だけは欠かさないようにしている。

夜寝る前にカフェインレスのフレーバーティーを飲むのだ。今日は、ビタミンCが豊富なハイビスカスがブレンドされたものにする。

手慣れた順序で紅茶を淹れていった。

紗雪はベッドの縁ふちに座りながら、ほのかにローズが香るルビー色の紅茶を一口含む。爽さわやかな酸味が口の中に広がり、心が落ち着いた。

この瞬間だけは、自分が自分であるような気がする。すり減った心が、なんとか保たれているのはそのおかげだ。

そして今日も、ティーポットを片付けて、紗雪はベッドもぐに潜り、眠りについた。

翌日の金曜日。

いつものように紗雪が始発で出社すると、オフィスにいる人たちの雰囲気は違っていった。

どうも誰も彼もがそわそわしているように見える。その反面、課長はいつも以上に機嫌が悪そうだ。

紗雪が不思議に思っていると、会社がテナントで入っているビルに早朝、不具合が発見されたらしい、と同僚が教えてくれた。急遽、点検のため今日の夜八時から土日の間、ビルが閉鎖になるそうだ。

このビルはそこそこの築年数で、定期的にさまざまな点検をしている。だが、ここ数年の度重な

る災害で他にもおかしくなっている箇所がないか徹底的に点検したい、というのがオーナーの意向のようだ。

つまり、今日は久しぶりに終電前に帰れる。

紗雪は、社員が心ここにあらずという状態になり、課長がピリピリしているわけを理解した。終電前に帰れるなんてどれくらいぶりだろうか。

入社して半年が経った頃からどんどん残業が長引き、土日が少しずつ削りとられ、三年目には二十四時間三百六十五日仕事をするようになっていた。

紗雪はそわそわとその日を過ごし、不機嫌な課長にどやされつつも八時に会社を出る。

この時間帯に外に出ることがしばらくなくなかったせいも、人や開いているお店の多さに驚いた。

寄り道をする余裕があるはずなのに、結局いつも通り真っ直ぐ駅に向かう。自由な時間があつた頃、どんな場所に寄り道をしていたのか思い出せない。

映画が見たいわけではないし、これといって食べたいものがあるわけでもない。そうになると必然的に自宅に帰るのだが、それはそれでもつたいないという気持ちが出てくる。

ふと、頭に浮かんだのは紅茶の葉専門店だった。けれど、今から電車に乗って行くと閉店時間ギリギリになる。せっかくだらなく行くのならゆつくりと選んで葉を買いたいので、今日はやめておこうと思ひ直した。

結局紗雪は自宅のある駅付近の割烹料理店（かつぽう）で夕食を済ませ、コンビニでお菓子と飲み物を買込んだ。

コンビニは二十四時間営業だが、疲れて帰ってくるとコンビニに寄る気も起きない。買える時に買い溜めするのだ。

自宅マンションがあるのは、コンビニから緩い坂道を上りきった先。

坂はちよつとしたもので大変ではないのだが、疲れている彼女には、山を登っている気分だ。

コンビニの袋を持ち直して視線を下に向けて歩く。すると、何かが落ちる音と悲鳴が聞こえた。

上げた視線の先で、大柄な女性が慌てて何かを拾っている姿が見える。

紗雪の目の前にコロコロと小さくて丸いその何かが二つ転がってきた。

紗雪も急いでそれを拾う。けれど、もう一つが横を通過した。

さつきまで上がってきた坂を引き返して、彼女はその丸いものを追いかける。

なんとか溝に落ちたり、車に轆かれたりする前に拾うことができた。

紗雪はホツとしつつ、こちらに向かってくる女性に声をかける。

「あいつ」

「やだー！ ありがとうー！」

近くまで来たその女性の顔が、外灯に照らされてよく見えた。

紗雪は無意識のうちに息を呑む。

綺麗な肌（お肌）に艶やかな唇、彫りの深い顔立ちは日本人には珍しく、一見ハーフのように見える。髪はアッシュグレレイのセミロングで、ところどころハイライトが入っているのか、キラキラと光っていた。

あまりにも美麗なその女性の姿に、なぜか紗雪の胸がときめく。

自分はそういう気があったかと錯覚してしまうほど惹かれた。

女性は紗雪の手元を見て、明るく笑う。

「わざわざ拾ってくれたの？ 優しいー。本当良かったわあ」

「いえ、たまたま近くに転がってきたので。気にしないでください」

「気にしないわけないわよお。これ、アタシにしたら大切な商売道具なのよね。もう、袋が破けるなんて、予想もしなかったわ」

色気溢れる雰囲気なのに、彼女の口調はサバサバしている。女性にしては少し低めのハスキーボイスが耳にとても心地よい。

「そういうことって、たまにありますよね。……あの、よかつたら運ぶの手伝いしましょうか？」

「いいの？ 助かっちゃう！ ほら、アタシの鞆、すでに中身がばんばんでもう入らないし、両手いっぱい塞がっちゃうしで、途方に暮れそうだったの。天使みたいな女の子って本当にいるのねえ」

にこにこ魅惑的な唇が弧を描く。

それだけで、紗雪は心臓が止まってしまうのではないかと心配になった。

……素敵な人。

女性でも、好みの容姿の人を前にすると、こんなに気分が高揚するものなのか。

紗雪は二十六歳にして新たなことを知った。

そのまま歩き出した女性のあとを追う。そして、着いたのは、紗雪の住むマンションだった。

驚いた紗雪は、女性にそのことを告げる。

「あら、同じマンション？ 何階？ ちなみにアタシは二階」

「私も二階です」

「うっそ、こんな偶然ってある？ もしかしてアタシたち運命なのかしら？」

真面目な顔をしてそんなことを言う女性が面白くて、紗雪は自然と笑ってしまった。

こんなふうに笑うのは、とても久しぶりだ。

楽しく会話をしながらマンションに入り、彼女の部屋へ向かう。紗雪の部屋の二つ先の角部屋が女性の住まいだった。

玄関先でおいとましようとした紗雪に、女性が「お礼がしたいし上がって」と言う。気がつくとき紗雪はふらふらとスニーカーを脱ぎ、その言葉に従っていた。

普段の彼女であれば、たとえ相手が同性であろうと同じマンションに住む人であろうと、簡単に他人の家へ上がったりはしない。お礼などいらないと断っただろう。そのくらいの警戒心はある。

けれど、仕事で思考能力が低下した状態で素敵な人に誘われたせいか、簡単に頷いていた。

女性の部屋に上がった紗雪は、そこが自分の部屋よりも広いことに気がついた。

紗雪の部屋は1DKだが、この部屋は2LDKある。

このマンションは部屋によって間取りが違うので、変なことではない。ただこの女性が、自分よりも明らかに高収入ということだ。

彼女の部屋は綺麗に整頓されており、欧米風のインテリアが飾られている。白を基調とした壁や雑貨に、ナチュラルな家具。まるでどこかのお店のようだ。

女性は持っていた荷物をキッチンに置き、温かいお茶を淹れてくれた。

ほうじ茶のいい香りが鼻腔をくすぐって、なんだかとても落ち着く。

女性は紗雪の斜め前に座り、にっこりと笑いながら自己紹介をしてくれる。

「改めまして、アタシはハルよ」

「ハル……さん」

「そ、ハル。本名は可愛くないから、みんなにそう呼んでもらってるの」

「私は——」

フルネームを名乗ろうと思った紗雪はそこで思いとどまる。ハルは、名前——あだ名のようなものを教えてくれたので、自分も名前だけを名乗ることにした。

「紗雪です」

「可愛い名前ー！ ユキちゃんね。よろしく」

柔らかにハルが笑い、釣られて紗雪も笑った。

「お礼にご飯……は、抵抗あるだろうし。そうだ！ ネイルさせてもらえる？」

「ネイル……ですか？」

「アタシ、ネイリストなの。だからお礼にハンドネイルさせて。もちろん無料だし、会社が派手な駄目なら、シンプルなものにするから」

ハンドネイルと言われて、紗雪は自分の爪を見た。

手入れをされていない指先は乾燥していて、爪の形もバラバラだ。

見せるには恥ずかしい。思わず、指先を隠してしまう。

それに気がついたのか、ハルがそっと紗雪の手に触れた。

「お手入れを始めるのは、いつからだっかっていいのよ。綺麗になりたいって気持ちがあれば、それで十分だし、アタシはお礼がしたいだけ。たかだか爪の先と思うかもしれないけど、目に映る自分が綺麗だと、気持ちも上がるものよ」

優しい瞳に、紗雪はおずおずと両手を差し出した。

「お願いします」

「はい、任せました！ じゃあ、こっち座ってね。換気扇が近くないと、匂いがちよつとねえ」

換気扇の近くにある小さなテーブルとイス。そこにハルはもう一脚イスを持ってきて、紗雪と向い合って座った。

小さなテーブルの上に、いろいろなものが置いてある。紗雪が名前も知らない道具だ。

「まずは、ここに手を載せてね」

その一つ、小さな枕に似た台座のようなものに、紗雪は両腕を載せる。すると、ハルに手を取られた。

紗雪はドキッとする。

ハルの指は男性のようにごつごつしていて、大きい。

もつとも、その爪先は整えられ、派手ではないがセンスのいいデザインのネイルが施ほどこされていた。

ハルは丁寧に紗雪の指先を消毒していく。甘皮を処理し、やすりで爪の形を整えた。慣れないからか、紗雪はその感覚にぞわぞわしてしまう。

「どんな感じのデザインがいいかしら」

「派手……じゃなければ」

「そうねえ。今の時季っぽくてシンプルなものもいいかも。あ、好きな色は？」

「好きな色？」

そう聞かれても、紗雪は自分が何色を好きなのかすぐには思いつかなかった。疲弊ひげした頭では好きな色すら瞬時に出てこないのかと、啞然とする。

「ユキちゃん？」

「あ……好きな色、すぐに思いつかないのでおすすめでいいです」

「——ならゆっくり考えましようよ。目に見えるのは好きなものもいいんだから」

ハルの言葉に、もう一度、自分が好きだった色を考える。

普段着るのは地味なスーツばかりで、ワードローブに明るい色味はない。

そこで、長年使っているマフラーや筆箱、ハンカチの色を思いだしてみた。

「藤の花の色とか、ノーザンライト——オーロラみたいなブルーグリーンが好き」

「いいわね。それなら、派手にならないように爪先だけのフレンチネイルにしましよう」

紗雪が伝えた色を、ハルが柵から何種類か取り出して見せてくれる。紗雪はその中から特に自分

が好きだと感じた色を選んだ。

季節感はないが、あまり気にしなくてもいいだろう。季節や流行などは置いておいて、ただただ目の中に好きな色を入れたかった。

「まずはベースコート塗っていくわね。本当ならジェルネイルにしてあげたいんだけど、それだと怒られた時、簡単に落とせないし、半分以上お店に持っていつちやって、今、色のバリエーションがないのよねえ」

「色ですか？」

「そ、ソフトジェルでも自爪を削らないやつのがいいんだけど、自宅にそのタイプのジェルがほとんどないのよ」

「そふとじえる……、削らない」

紗雪はジェルネイルに詳しくない。なので、ハルが言うソフトジェルも削らないジェルも、一体なんなのか理解ができなかった。

脳内に浮かぶのは、うずまき型のソフトクリームだ。絶対にこれじゃない感しかない。

「今日は普通にネイルポリッシュするけど、今度時間がある時に、ぜひジェルネイルもさせてね」

「はあ……」

「ふふ、ユキちゃんは可愛いわねえ。おどおどしているように見えるけど、内面はしっかりしてそう」

「そんなことないですよ。しっかりしてたら、今の仕事だって辞めてるはずですよん」

「あら、仕事辞めたいの？」

「辞めたい……というよりは、逃げたいです。私にはあそこが監獄に思えてしまつて、苦しくなります。息をするのが精一杯で、目の前の電車に飛び込んだらもう会社に行かなくてもいいんじゃないかって、いつか考えてしまひそうで怖いです」

なぜこんな話を初対面の人に行っているのか。そう思うのに、ハルの柔らかい声を聞き爪に向けた真剣な眼差しを見ると、ぼつりぼつりと話し出してしまふ。

会社がブラックなこと。前の同僚がどうなったのかという噂。心も身体も疲弊していてもやる気がおきないこと、など。

「実は、両親に相談したこともあるんです。毎日遅くまで働いて辛いつて」

「ご両親はなんて？」

「母は心配してくれましたけど、父は仕事なんてそんなものだから弱音を吐かずに頑張れつて」

電話したのは、少し慰めてほしかつただけだ。

それなのに父にそう言われた紗雪は電話を切つたあと、泣いてしまつた。

詳しいことを話していなかつたので仕方がなかつたのかもしれない。それにあの時は、まだブラック会社の片鱗が見え始めたばかりだつた。

けれど紗雪は、自分が弱いんだと思ひ込んだ。

「弱音なんて吐き出せる時に吐いてしまつたほうがいいの。言葉に出すつて、結構重要なことなのよ。疲れたーとか、辛いーとか、ね。それさえ誰にも言えなくなつたら、あなたが壊れてしま

うわ」

「そう、ですかね」

「ええ。完全に壊れちゃう前に修復しないと」

鼻をずびずびと吸りながら、紗雪はじつと手元を見つめる。すぐに最後の一本が綺麗なフレンチネイルになり、トップコートが塗られた。

爪の先がともキラキラしていて、それだけで余計に泣きたくなる。

「いい子ね。こんなに頑張つて、こんなにすり減つて。アタシが言うのもなんだけど、もう頑張らなくなつていいのよ？ 休憩だつて必要なんだから。アタシじゃ役に立たないかもしれないけど、話は聞けるわ。辛くなる前に、なんでもいいからくだらない話をしましょ」

「はい……」

ハルが紗雪の頭を優しく撫でた。その手がティッシュを渡してくる。

誰かに話を聞いてもらいたかつたのだと紗雪は自覚した。このやり場のないどうしようもない感情を吐き出したかつたのだ。

けれど、愚痴を聞いてくれていた友達や恋人は去つていつた。これ以上なにも失いたくないという気持ちが言葉にするのを諦めさせた。

頑張つたねと言つてほしかつた。もう頑張らなくてもいいと優しい言葉をかけてほしかつた。ただ、それだけだつた。

——この日、紗雪は会社を辞める決意をした。

普段であれば休日出勤をする土日。

その一日目の土曜日を、紗雪はとにかく眠ることに費やした。

寝溜めができないことは理解している。けれど、慢性的な睡眠不足に陥っている彼女にとって、ごくまれにある休みの日に眠り続けることが贅沢なのだ。

もちろん、学生の頃のように十時間以上眠り続けることは不可能で、途中何度か起きてトイレに行ったり、軽く食べたりしながらもほとんど寝て過ごす。

そして日曜日は、スーパーへ買い物に行つて、ここ最近まったくしていなかった料理をした。

途中でふと、ハルにお礼としてこれを持って行こうかと考えたが、見た目がよくなかったため断念。

味は美味しい。美味しいのだが、あのキラキラして綺麗なハルに、ぐちゃっとしている食べものを手渡す勇気が、紗雪にはない。

お礼はまた今度ゆっくり考えることにする。

代わりというわけでもないが、貯金残高を確認した。会社を辞めたとしてどのくらい生活できるかを計算する。

節約すれば、数ヶ月は問題なく暮らせそうだ。

二、三ヶ月は、なにもしないで過ごしたい。

そこから就職活動を再開するとして、どの程度で次の会社が見つかるだろうか。

不安なことや考えなきやいけないことは、多い。

それでも紗雪は、どうにか自分の思考が再開したことに安堵を覚えた。

そして翌日。

紗雪はいつものように始発で仕事に赴いた。

デスクに向かって仕事をしていると、自然と爪の先の色が見える。ふと手を止めて、塗つてもらったばかりの綺麗な爪先を眺めた。

自然に小さな笑みが浮かぶ。暗い気持ちが浮上していった。

たかが爪先、されど爪先。

「楠沢！」

「……はい」

気持ちに少し陽が当たっていたのに、かけられた課長の声ですぐに曇る。紗雪は心に防御壁を作った。

「この資料。なんでこんな雑なもの作れるんだよ。その頭はお飾りか？ ああ？」

「申し訳ございません」

「謝ればなんでも許されると思ってたんじゃないぞ。それになんだ、その爪。なに調子のとってんだよ！ お前にそんなのが許されるわけないだろ」

「はい、申し訳ございません」

「ほんっと、お前の頭の中はそういったことしかないわけだ」

デスクの上に資料を投げつけられる。

紗雪はため息をつきながら、一体この資料のどこが雑だったのかを考えた。

これは課長の指示通りに作ったもので、紗雪個人がレイアウトしたものではない。結局のところ、作り方が悪いのではなく課長に八つ当たりされただけだ。

こんなことは日常茶飯事。

紗雪は息を深く吸い込んで、パソコンに向き直る。そして、仕事の合間にそれとなく他の社員が会社をどう思っているのか、情報収集を始めた。

やはりどの人も会社を辞めたいらしい。

だが、疲れと恐怖で思考が切れてしまっている人ばかりだ。

そんな中、彼女と同じようにこの休みで正常な判断力をとり戻した人がいた。

「楠沢」

「降旗さん、お疲れさまです」

声をかけられ振り向いた先には、先輩で営業職の降旗がいる。彼に手招きされ、紗雪は廊下の隅へ連れていかれた。

「——ちよつと小耳に挟んだんだけど、会社、辞めるのか？」

「そのつもりです」

小さな声で答えると、降旗は大きく頷く。

「実は俺も数ヶ月のうちに動く予定なんだ。転職するつもりだったんだが、せつかくだし独立しようと考えてる」

「独立ですか。凄いですね」

紗雪は彼の言葉を聞いて、単純にそう思った。

自分の業務は営業事務だが、正直この仕事が好きかと問われれば否だ。

数字を追いかけて、営業に八つ当たりをされる毎日で、どこを好きになればいいのかわからない。

それに黙々、淡々と仕事をするのが苦痛だ。

今ではさすがに慣れたが、同じことを繰り返す日々には飽きている。慢性的に寝不足というのも相まって、常に眠くなった。眠気のピークにはガムや栄養ドリンクなど、さまざまなものを口にして寝ないようにしている。

もちろん仕事環境が悪すぎるということもあるのだが、この会社を辞めたあとに同じIT関係の業種に転職したいとは思えなかった。

営業事務というのは基本的にどこも同じようなものだろうと、紗雪は思っている。

だがこの仕事以外をやったことがないので、次をどうすればいいのか見当もつかない。

一方、降旗は同じ業種、同じ仕事を改めて自分で始めると言う。

自分にはできないことだ。

「……それで、相談なんだけど。もし楠沢がよければ、俺の会社を手伝ってくれないか？」  
「え？」

「課長がなんて言おうと、お前は仕事ができる。一緒に事業を守り立ててくれたら助かるんだ」  
疲れた者しかいないはずの会社の中で、彼は妙にきらきらした顔になる。  
紗雪は、凄（ひど）いと思うのと同時に、なぜだか少し恐怖も感じた。

「……はあ。正直まだそういったことは考えられないので、すみません」  
あたり障（ざら）りのない言葉を紡いで頭を下げる。

降旗は「そうか、考えるだけ考えてみてくれ」と言い、なにかを思いたしたように言葉を続けた。  
「それとは別なんだが、辞めた奴に話を聞いてみた」

「辞めた人にですか？」

「そ。会社の人間が自宅まで行って嫌がらせしたとか、いろいろな噂があるだろ。その真相が知りたくて、あらゆる伝（つ）手を使ってみたんだ。そうしたら二人捕まえられてさ。で、たしかに何度か連絡があったらしいんだが、直接誰かが会いに来ることはなかったって。俺たちからの電話は、なにを言われるかわからなかったし、上司の命令でかけてきたのかもしれないって不安で、取れなかったんだそうだ」

「そういうこと、だったんですか」

「ああ。だから、最悪辞表出して逃げられるのはわかった。ただ、その場合、保険や年金とかの間

題が出てくるんだよな。確定申告や失業保険の手続き、次の会社のために源泉徴収票を提出したくても、この感じだろ？俺たちに渡してくれるわけがないんだよな。そのあたりが厄（や）介（かい）ではあるが、どうにかなるっていえばどうにかなる問題だ。最終的に労基（ろうき）っていう手もあるしな」

「でも、労働基準監督署なんて、余計に会社に恨まれそうですね」

二人で少し押し黙る。特にそれ以上話すこともなく、紗雪は仕事に戻った。

あまり話をしていると、怒鳴られて仕事量が増えてしまう。会話はできるだけ最低限で終わらせるのがいい。

結局以前と変わらず、彼女は終電で帰宅し、食事を取って眠った。

そして、翌日も同じように働きながら、回復した体力と精神がまたゴリゴリとすり減り始めていくことに気がつく。

このままでは駄目だとわかっているものの、辞めるためになにをしなければいけないのか、情報を集めきれない。

水曜日。

紗雪が終電でマンションに戻ると、部屋の前になぜかハルが立っていた。

「……ハルさん？」

「もお、やっと帰ってきたー」

彼女は紗雪を見ると、ぷくっと頬を膨らませる。

その表情に、なんだか心がホツとした。自分でも不思議だ。まだ出会って数日だというのに、ハ

ルの存在が紗雪の癒やしになっている。

「すみません」

「ううん。ブラック企業で大変だもんね。で、これ渡したくて待ってたのよ」

ハルから手渡されたのはプラスチック容器に入っている食事と、スマホと接続できるようにコネクタがついた、USBメモリだ。

「このUSBは通勤電車の中でも見てみて。とりあえず今日はハルさん特製ご飯を食べて寝ちゃいなさい」

「ありがとうございます」

「いいのよお。アタシが好きでやってるんだしね」

手をひらひらとさせ、ハルは部屋に戻っていく。それを見送って、紗雪も部屋へ入った。

彼女に渡された容器の中には、ロールキャベツとサラダが入っている。電子レンジでご飯と一緒にそれを温めて、食べた。

ハルは料理が上手らしい。それは本当に美味しくて、温かい気持ちになる。

そして紗雪は、いつものようにカフェインレスの紅茶を飲んで就寝した。

翌朝。

紗雪はハルに言われた通り、出勤中の電車でUSBの中身を確認した。

何個か入っていたPDFの中に、「最初に読むこと」というタイトルのものがある。

紗雪はまず、それを開いた。

【ユキちゃんへ。出勤にかかる時間がわからないから簡潔にいくわよ！】

冒頭に書かれたその言葉に首を傾げつつ、スクロールしていく。

そこには、会社を辞める方法が書いてあった。

【①まず退職願を出してみる。(課長以上の役職に渡すこと！ 退職願のフォーマットPDFも入れているからコンビニで印刷可能よ。会社専用じゃなくても有効だからね)】

② 受理されたら、一ヶ月ぐらいで引き継ぎをする。(それすら嫌だったら残っている有休全部使って、退職まで休んでしまいなさい)

③ 受理されなかった場合、退職届を出す。(配達証明付き内容証明を郵送するのよ！)

④ 残業代が未払いなら、すぐに請求しましょう。

⑤ その後のことは辞めたあとにゆっくり話をしましょうね。

知り合いに現役の弁護士がいるからいつでも紹介可能よ。アタシの連絡先も入れておくから、SNSでも電話でもしてきてちょうだい。時間は気にしないでいいわ。ユキちゃんのためなら夜中も起きてあげる】

(———どうして、ここまで……)

紗雪は感謝よりも先に疑問に思った。

出会ったのは数日前で、ちょっとした愚痴を聞いてもらっただけの仲だ。それなのに、なぜこんな手間のかかることをしてくれたのだろうか。

弁護士まで紹介してくれるなんて普通はない。

そう考えている気持ちの中でちらっと、弁護士に知り合いがいるなんて凄いなとも思った。出会ったばかりのハルを、信用するのは危険かもしれない。

けれど、あの日優しくしてくれた彼女を信頼したいし、この厚意を無下にしたくなかった。

紗雪はその日の帰り道、さっそくコンビニで退職願と退職届のフォーマットを印刷した。

部屋に戻ってすぐ、それに自分の名前と日付を書き込む。

こういうのは悩んだり迷ったりしては駄目だ。やると決めたなら即行動を起こさないと、またあの日々に忙殺されてしまう。

その作業を終え、紗雪はベランダに出る。

空気が冷たい。風で身体が縮こまるが、透き通るような爽やかさだ。

遠くの明かりをぼんやりと眺めながら、紗雪は、自分が全てをきっちり調べてからでないで辞めてはいけないという固定観念にとらわれていたことに気がついた。

少しでもミスがあれば、怒鳴られ否定される。この三年間で、それがすり込まれてしまった。

その考え方から簡単に抜け出せるわけもないが、これが第一歩だ。

その翌日。

紗雪は一日の中でまだ時間に余裕がある朝早いうちに、部長に退職願を渡す。

部長はそれを受け取って、デスクの引きだしに片付けた。にっこり笑い「まあ、この話はおいおいね」と言う。

これは受理されたいだろうと直感的にわかった。

有休を消化して辞めたいと伝えたが、辞めるなら有休なんていらなくても返される。

わかっていただけだが、どこまでもブラックだ。

そして、彼女が退職願を出したことはすぐに社内に広まった。

嫌な視線を向けてくる人が多く、針のむしろだ。

そのせいなのか、仕事もいつもより多く渡される。ため息をこらえつつ、紗雪がパソコンに向かっていると、降旗が近づいてきた。

「楠沢、退職願出したのか？」

「はい、出しました。けど受理はされないとします」

「やっぱなあ。俺は俺で頑張るから、楠沢も諦めんなよ。あと、今度ゆっくり相談したいことがあるんだ。今時間を作るのは難しいだろうし、改めてな」

「はあ……」

紗雪は内心で首を傾げた。

降旗とは別段仲がいいわけではない。少し話をしたことがある程度だ。

それなのに、相談があるというのは不思議だった。一体どんな相談があるというのだろうか。

それに、紗雪は今、自分のことで手一杯なので、他人の相談に乗っている余裕がない。彼には悪いが、力になれそうになかった。

時間や気持ちに余裕があれば、誰かの相談も聞けるし、なにかしらの手伝いもしたかもしれない。

そう、今自分を助けようとしてくれているハルみたいに。

紗雪は、ふとハルのことを考える。

余裕ができたなら、彼女にお礼がしたい。

（――私が無事に会社を辞めたら、ハルさんは喜んでくれるかな？ 笑ってくれるといいな）

紗雪は頭の中でハルの笑う姿を思い浮かべ、息を深く吐き出した。

辞めるためには行動あるのみだ。無事に辞められるまで頑張ろう。

退職願は受理してもらえなさそうだから、やはり退職届を内容証明付きで郵送するしかない。

そうなるかと一度、弁護士に相談したほうがいい気がする。

しかしこれまで弁護士という人たちと関わったことがないので、どうすればいいのかわからなかった。

それに、お金を支払うことはできるだろうが、相談する時間がない。

退職願を出したことで、紗雪に任される仕事の量はますます増えている。有休は使用できるかわ

からない。弁護士に会う時間がとれそうになかった。

メールで相談できないか、ハルに聞いてみようか。

やることは山とある。だが自分のためだ。

そして紗雪はボロボロの状態で帰宅した。すると見計らったかのようにハルが部屋から出てくる。

目をパチパチさせていると、ハルに手招きされた。紗雪はなにも考えずふらふらと誘われるまま、

彼女の部屋へ入る。

「お疲れさま、今日も一日頑張ったわね」

「お疲れさまです……」

紗雪は会社にいる時の癖で、お疲れさまと返す。けれど、疑問があったので、ハルに聞いてみた。

「あの、なんで私が帰ってきたってわかったんですか？」

紗雪は特にハルに連絡を入れてはいない。真っ直ぐ部屋へ向かっていたのに、彼女は扉を開けて

手招きしたのだ。

「ああ、ベランダよ。ベランダ」

「ベランダ？」

「ユキちゃん帰ってこないかなーって、ベランダに出て待ってたのよ。で、マンションに入ったの

を確認して玄関の扉を開けたってわけ」

「そういうことだったんですね」

だからあんなにタイミングよくハルが出てきたのかと、紗雪は納得した。

「とりあえずご飯食べなさい、ご飯。食べながら今後について話し合いよ！」

「話し合い……」

「そ、迷惑かと思ったけど一回くらい話ができればいいな、と思って。アタシの知り合いの弁護士

呼んでおいたの」

「え!? 今いるんですか!? こんな時間に!」

ありがたいタイミングだ。本当にこんなことがあっていいのか。

「いるわよー」

にこのことハルは笑っているが、リビングにいる男性はこころなしかムスツとした顔をしている。「お前なあ、俺だつて忙しいんだからな」

「はいはい、わかっているわよ。けど、高校時代サボり魔だったあんたに勉強を教えてやったのはアタシなんだから、その貸しを返してくれた方がいいんじゃない？」

紗雪は男性に向かって頭を下げる。彼は立ち上がり、鞆の中をごそごそと探して名刺を差し出した。

「ありがとうございます」

受け取った名刺には弁護士・水谷聡みずたにさとしと書かれている。

「一応こいつからある程度話は聞いている。退職願は出したのか？」

「はい。今日の朝出してみましたが、受理される気がしません」

「ま、聞いた状況のブラック会社ならそうだろう。やっぱり退職届を郵送して、有休消化して辞めるのが一番だな。未払いの残業代とかあるのか？」

「わからないぐらいに……」

「なら、それを払わせるか。聞いた仕事時間を考えれば特定受給資格者にもなるな。辞めたらすぐハローワーク行って、貰えるもん貰ったらいい。ま、詳しくは辞めたあとだ」

「はい、わかりました……」

ご飯を食べる前に、話が纏まとまってしまった。紗雪はただ一方的に言われたことを聞いていた

けだ。

「もお！ そんな怖い顔して怖い言い方しないでよね！」

水谷の態度に、ハルが両腕を腰にあててぶんぶん怒っている。ハルは紗雪より年上だろうが、その怒り方すら可愛い。

けれど水谷からはそう見えなかったらしい。

「気持ち悪いからやめろ」

眉をひそめてハルを睨にらむ。

「ほんつと！ ほんつと！ 失礼なんだから！ 嫌になっちゃう！」

「事務所ではもつと穏やかに笑って優しい声を出してるよ。お前に突然呼び出されただけで、本来なら今は仕事外の時間だからな。仕事モードの俺はオフ状態なんだよ」

「ユキちゃん、ごめんね。こいつこんなんだけど、弁護士として優秀なのはアタシが保証するから！」

「ありがとうございます」

紗雪は二人に向かって頭を下げた。水谷が彼女を見下ろす。

「大丈夫だ。俺とお節介なこいつがいれば、君は今の地獄から抜け出せる」

途端にハルが口を尖らせた。

「本当のことも、あんたにお節介って言われるとなんかイラッとするわね……。ま、アタシがいれば大丈夫よお！ 最後までしっかりサポートしてあげる」

真正面から紗雪を抱きしめてくる。

紗雪の目の前が、急にぼやけていった。感謝の気持ちでいっぱいになっているのに、うまく言葉を発することができない。

喉も鼻も痛くて、身体が熱かった。

「こんな小さい身体で精一杯頑張ってるだもんね。大丈夫よ……大丈夫」

背中を撫でられると、ますます泣きたくなる。

ふいに水谷が呆れたような声を出した。

「おい、食うなよ」

「ちよっと、段階踏んでるところなんだから、余計なこと言わないでちょうだい」

「はいはい。じゃ、俺は帰るぞ。またなんか会ったら呼んでくれ。ま、その子のために働いてやるよ」

「そ、馬車馬のように働きなさい」

「うるさいな。お前には時間外手当、請求してやるからな」

紗雪はぐすぐすとハルの温かい胸の中で鼻を吸った。

そうしながらも、ハルと水谷の会話はどこか不思議だなと思う。

水谷のハルの扱い方は、女性相手という感じがしなかった。それに先ほどの食うという言葉の意味がいまいちよくわからない。

けれど、深く考える前に、弁護士費用のことが頭を過った。

「あ、あのっ！」

水谷を呼び止めようとしたが、彼は玄関から出て行ってしまったあとだ。

失敗したと落ち込む紗雪の顔をハルが覗き込んできた。

「もしかして相談料のことを心配してるの？ それは余裕ができたらちゃんと説明するわ。友達割引があるから、そんな法外な額にはならないわよ」

「でも、時間外手当って言ってました」

「それはアタシあての話よ。ユキちゃんは気にしなくてもいいの。考えるのは会社を辞めることだけにしなさい」

「……わかりました」

「お金のことは会社を辞めてからきっちりしよう。今まで使う時間がなかった給料がそれなりに残っている。」

紗雪は今はず会社を辞めることだけを考えて、行動しようと思った。

ふいにハルが紗雪に謝る。

「本当、ごめんね」

「なにがですか？」

「USBには連絡待っているとか紹介するとか書いたくせに、先走って弁護士勝手に呼んだりして。迷惑とか傲慢だとか思ったら、言ってるね」

ハルは紗雪の手をぎゅっと握る。

眉を下げてしょんぼりと返答を待つ彼女を、紗雪は抱きしめなくなった。勝手に、なんて思わない。動けない自分には、とてもありがたいことだ。

会社を辞めるのが怖くて、思考が停止し、動き出してもまた恐怖に駆られる。決意して数日なのに、恐怖に呑み込まれそうになっているのだ。

それを強制的にでも推し進めるハルは、紗雪の背中を押す大切な存在に他ならない。

もしもつと自立していて、きちんと思考が働いていたなら、自分のことは自分でできると怒ったかもしれないが、今の紗雪にそんな気持ちはまったく湧かなかった。

「私にはこれくらいの強引さが必要なんだと思うんです。よければ、会社を辞めるまで私の背中を押してください」

「任せて！ 全力で頑張るわ！」

ハルが明るい笑みを浮かべる。

「あ、でもハルさんの仕事に支障が出ないようにしてくださいね。私のせいでなにかあったら嫌ですもん」

「大丈夫よー！ ちゃんと仕事してるもの」

そのあと紗雪はハルが作ってくれたガバオライスを食べた。

こういうものはお店で出るメニューというイメージだったので、ますますハルに憧れる。

余裕ができたらくらこういご飯も自分で作るようになりたい。

ハルの食事を口にしてしていると、普段自分が口にしてるものがいかに味気ないか気がつく。自分

のために作ってくれた料理というのはやはり特別なのだ。

そして食事を済ませ、自分の部屋へ戻った。お風呂に入り紅茶を飲んでベッドに潜る。

ふいに紗雪はハルに抱きしめられた時のことを思い出した。

女性にしては筋肉質な彼女に抱きしめられた瞬間、思わず男性に抱きしめられていると錯覚してしまった。

失礼なことなのに、その記憶がよみがえるだけで胸の鼓動が速くなっていく。

紗雪は自分の頬を手で押さえながらバタバタとベッドの上で転がる。バカなことをしているという自覚はある。でも、どうにもおさまらない。

友人に言ったら、同性愛者なのか聞かれてしまいそうだ。

もっとも、基本始発終電コースで働いている紗雪は、久しく友人に連絡を取っていないかった。

それでも久しぶりに会って話したい。いろいろと聞いてほしい。

そんなことを考えつつ、紗雪は眠りについたのだった。

翌週の土曜日。

休みなど関係ない状態なので、紗雪は普通に会社に行き、業務の合間に残っている有休の日数を確認した。そして引き継ぎデータを作成する。

会社に置いてある私物は少しずつ自宅へ持って帰っていた。物がなくなりすぎると辞めようとしている日がバレて、邪魔されるかもしれないので、ある程度は残していくつもりだ。

そう、紗雪は会社を辞める日を決めた。  
来週の水曜日だ。

ちょうど月の最終日で、辞めるには切りがいい日。  
けれどそれ以上に、一昨日自分の出した退職願が部長のゴミ箱の中に入っているのを見てしまい、  
耐えられなくなったのが大きい。

予想をしていたことはいえ、心が疲弊する。

退職届はハルが郵便局から出してくれた。

本来であれば先日紹介してもらった水谷がやるものらしいが、なぜかハルが自分があると  
張ったのでお願いしたのだ。明日には会社に届くだろう。そして、木曜日から紗雪は入社しない。

ある程度片付けを済ませ、会社をあとにする。

そして、最終日。彼女はそこで、会社が入っているビルを見上げた。

三年以上ここに通い続けた。

苦しくて辛くて目の前が真っ暗になりかけたことが何度もある。それをいい思い出することは  
できないが、やはりある程度の愛着はあった。

勝手に辞めることで、他の社員に迷惑がかかることもわかっている。申し訳ない気持ちがないわ  
けではない。

紗雪は走って電車に乗り込んだ。

振り返ってはいけない。振り返って、同僚たちのことを考えてはいけない。

自宅マンションまでの緩い坂道を上って彼女は部屋に戻った。なんだかとても疲れてしまったわ  
で、なにもせずに眠ることにする。

綺麗に塗られていた爪が少しはげてしまっているのが悲しい。一生残り続けるものではないとわ  
かっているけれど、ハルとの最初の日のことが消えていってしまうようで寂しくなる。

この日久しぶりに、彼女は目覚ましをかけないで眠りについた。

翌朝。慣れてしまった身体は、いつもの時間に目を覚ました。

ぼんやりとした頭で今日が行かなくていいんだと思い、紗雪は毛布を被り直す。

気持ちよく二度寝して目を覚まし、カーテンを開けた。

久しぶりになんの憂いもなくゆっくりと眠ったからか、陽の光がキラキラして見える。そのまま窓を開けて部屋に風を通すと、時間が動き出した。

今さらになって、部屋の空気がこんなにも滞っていたことに気づく。

ここ数年、眠るためだけに帰っていた部屋。

ゴミを出すくらいはしていたが放置していたものも多く、正直綺麗とは言いがたい。

それに比べて、先日見たハルの部屋はとて片付いていた。

紗雪はポットでお湯を沸かす。

最近飲んでいなかった種類の紅茶を飲もうと、コレクションを取り出した。さまざまな缶に入っている葉の中でアッサムを選ぶ。

アッサムは有名な葉で、カフェに行けばだいたいある。けれど、ここ最近の紗雪はカフェに行く時間もなかったし、疲れていたのもあって比較的軽い味のものを好んでいた。

昔、親しんだ味を最初に楽しみたい。

何種類かあるアッサムの葉の中から特に好きなお店のものを手に取る。

一杯目はミルクティーを淹れ、朝の時間を楽しむ。

しばらくぼんやりとして、ふとスマホを見た。

さっきまでひっきりなしに電話がかかっていたが、無視をしているうちにおさまった。マナーモードで放置していたのだ。

確認すると、案の定会社からだった。

同僚など会社関係の人たちから電話やSNSでメッセージが届いている。

メッセージは安否を心配しているものから、辞めたお祝い、迷惑だという文句など多岐にわたった。

その中にハルからの連絡を見つける。

【起きたら連絡ちょうだい】

そう書かれているのを読んだ紗雪は、急いでSNSで返信をしようとして、指を止めた。もう時間や人の目を気にしなくてもいいのだ。

彼女はハルに電話をすることにした。

画面をタップして、スマホを耳にあてる。ワンコールが終わらないうちにハルが出た。

「おはようございます」

『おはよー。と言ってももうお昼よ。起きたなら一緒にカフェ行きましょ、カフェ！』

「わかりました」

『じゃあ、一時間後に迎えに行くわね』

ハルはご機嫌な声で言って電話を切る。

紗雪は一瞬、支度に一時間もいらぬのにも思った。けれどすぐに、ハルのほうに時間がかかるのだろうと納得する。

クローゼットを開けると、四年前に買った服と、会社に着ていつていたスーツしかなくてげんなりした。

仕方ないこととはいえ、着ていく服がない。

できるだけマシな服を選び、使い古したコートとマフラーを手を取った。

化粧も最近ほとんどしていなかったため、コスメ類は全て古びている。これらも一新したい。それでもしないよりマシかと軽く化粧をして、かかどがすり減ったスニーカーを履いた。

少し落ち着いたら、服や靴やスキンケア用品など、いろいろと買いそろえなければ。

玄関先に座りながら、そう考える。

そして、足をパタパタと動かしてハルが迎えに来るのを待った。

電話からちょうど一時間後に、玄関のチャイムが鳴る。

飛びつく勢いで迎えようとして、紗雪は身体を押しとどめた。

すぐに開けたら、扉の前で待っていましたと言っているみたいなものだ。それはなんだか恥ずかしい。

彼女は五秒かけて深呼吸をし、ゆっくりと扉を開けた。

「あら、前と雰囲気違って可愛いわね」

扉を開けた先で、いつも通り美麗なハルが艶やかに笑っている。

昼の光のせいか、紗雪は目が痛くなった。

「さあさあ、カフェに行きましょう。アタシのおすすめなのっ！」

「はい」

ハルはマンション前の坂を下りて、路地裏へ入る。紗雪はこんなところにお店なんてあったらろうかと疑問に思った。

ここには社会人になる時に引越してきた。

最初の一年はともかく二年目からはほとんどお店が開いていない時間帯にしかいなかったし、休みがあれば休息にあてていたため、自分が知らないのも当然かもしれない。

案の定、感じのよいカフェが見えてくる。

カフェに入ると、弁護士の水谷が優雅にコーヒーを飲んでいた。

「来たか」

「あ、こんにちは」

「おつまませー！」

ハルが紗雪を連れて、水谷の前に座る。

昼が近いこともあって、カフェにはランチメニューが置いてあった。

紗雪はそのランチメニューをハルと一緒に頼み、会社から電話やメールがひっきりなしに来ることを水谷に伝える。そのタイミングでまた電話が鳴った。

「課長だ……」

すると水谷が電話に出て、自分が弁護士であること、何かあるなら自分を通すことと話し出す。彼は紗雪の代わりに交渉を進めた。

それほど時間が経たないうちに、電話を切る。

「ま、これで大丈夫だろ。弁護士雇ってるなんて、あいつは本気だと思わせるには十分だ。残業代については後日、話をつけるから安心してくれ。それと、俺への支払いはこいつから受け取ってるから」

「え!? そんな! 駄目です! これは私のことなんですから、私が支払います」

慌てる紗雪に、ハルが口を出す。

「えー、ただのアタシのお節介だしい」

「駄目です!」

紗雪はきつぱりと言った。

会社は辞めてしまつたが一応自立した大人なのだ。こういった支払いは自分でしなければ。

もちろん、ハルの厚意はありがたいし、払ってくれるなら楽だという気持ちもある。けれど、そこまでしてもらうわけにはいかない。

どうにかハルが支払った料金を彼女に直接返すことを了解してもらつた。

言われた金額は相場よりも低いが、お友達価格なのだそうだ。二人にそう言われると、その金額を支払うしかない。

紗雪は、せめてなにかしらのお菓子を一緒に渡すことを心のうちで決めた。

一段落すると、水谷が口を開く。

「——そうだ。普通なら離職届が十日前後で届くと思う。もし届かなかつたら相談してくれ。それに、退職理由がなんて書いてあるかも確認な。一身上の都合や自己都合だつたら、ハローワークになぜ辞めたのかをきちんと報告したほうがいい。とはいえ特別な事情で辞めた場合、制度から貰える金はあるがたいが、手続きが面倒くさい。どこかしらに出向く必要もあるしな。それは少し時間が経つてもできるから、とりあえず君はしばらく休んだほうがいい」

「そうよそうよ。すぐに何かしようとしなくて、休んだほうが絶対いいわ」

「はい、ありがとうございます。私もちょっとゆっくりして、次のことを考えたいと思います」

そんな話をしていると、ランチが運ばれてくる。紗雪は久しぶりにカフェでのランチを楽しんだ。その後、水谷は仕事に戻ると先に出ていく。

ハルと二人きりになった紗雪は、なんだかドギマギしてきた。

自分でも不思議だ。なぜ、女性相手にこんなにも胸がときめいてしまうのか。

ハルを改めて見る。

綺麗に化粧をし、爪の先まで手入れしている彼女は身体つきだけが女性らしいといえず、身長が高いせいかな筋肉質で大柄だ。

あまり気にしていなかったが、全体的に骨太な気もする。

ハルのことをじっくり観察していたからか、目が合ってしまう。紗雪は彼女につこりとほほ笑まれた。

「ねえ、ユキちゃん。せっかくだから、このあとどこかで買い物でもしない？」

「え、いいんですか？ あの、お仕事とかは？」

「今日は夕方までなら平気なのよ。夕方から二件予約入ってるから、行かなくちゃいけないんだけどね」

普通であれば、ネイリストはずっとお店にいて、指名だけでなく飛び込みのお客にも対応するのではないだろうか。

紗雪は少し心配になったけれど、すぐにその考えを振り払った。

ハルが平気だと言うのなら、平気なのだ。

二人でお店を出て電車に乗り、洋服や雑貨などさまざまなものが売っている大型の複合ビルに行った。

ハルに連れ回されるまま、いろいろなお店に入って服や靴を見る。

彼女は紗雪に似合うものをどんどん買ってしまう。紗雪がお金を渡そうとしても、自分が好きでやっていることだからと受け取ってもらえない。

だから代わりに、ハルに似合う靴とピアスを買った。

結果、二人とも両手いっぱい紙袋を持つことになる。

表通りを歩いていると、ガラスに自分たちの姿が映っているのに紗雪は気がついた。

綺麗な女性とみずぼらしい女が並んでいる。

紗雪は改めて自分の姿に愕然がくぜんとした。

ガラスに映る自分は自信がなさそうで、髪の毛もボサボサだし洋服も身体に合っていない。靴だつて汚れている。

昨日まで自分の姿をともに認識していなかったとはいえ、これはひどすぎる。

どうにかしなければ。ハルにどこの美容院に行っているか聞いてみようか？

そんなことを考えていると、一台の車が二人の目の前に停まった。

その車は真っ赤でとても目立っている。すぐに窓ガラスが下りてサンダースを外した男性がこちら——ハルを睨にらんだ。

「おい、陽ま！ なにこんなところで女と油売ってんだよ！ 仕事はどうした仕事は」

途端にハルが怒鳴り返す。

「うっせえな！ お前、人のことを陽まって呼ぶなっつってんだろ！ ハルって呼べ、ハルって！

あと、仕事は夕方からだ」

「なーにが、ハルだよ。気色悪い」

「いや、ほんつと失礼だわ。驚くほど失礼」

「オネエやってんのは勝手だが、それ使つて女騙だますようなことすんじゃねえぞ」

「騙だますかっ！」

紗雪は二人のやりとりを呆然と聞いていた。

頭にひっかかるのは、オネエという言葉。

オネエ——よくテレビに出ているタレントの姿が頭に浮かぶ。身体は男性だが心が女性だったり、単純に綺麗になるのが好きだったりする人たち。タイプはさまざまだが、オネエと称されている人たちがいることは、紗雪も知っている。

この時やつと紗雪は、彼女が彼であることに気づいた。

しばらくして男性が車を発車させ、ハルが傍そばに戻ってくる。

「ごめんねえ。あいつといると口調が戻っちゃう時があるのよ。本当やんなっちゃう」

「あの、ハルさん」

「ん？ なあに？」

「ハルさんは男性だったんですか？」

「——え、嘘!? もしかしてユキちゃん気がついてなかったとか……そういう？」

「全然気がついていませんでした。綺麗な女性だとばかり思っていました」

「や、だ。アタシてつきりわかっているもんだと——ほら、アタシ、口調はこれで化粧もばっちりだけど、身体つきは完璧に男なのよね。まあ、鍛えてるっていうのもあるし、手とかも男なんだけど……」

ほら、と見せられた両手。たしかに女性らしい柔らかさはなく、指の関節は太くごつごつとしている。手の大きさだつて紗雪より一回り大きかった。

こんなに男性らしいのに、先入観でハルを女性だと信じ込んでいたのだ。女性同士だと思つて行動したあれこれが、紗雪は恥ずかしくなる。けれど同時に腑ふに落ちてもいた。

今まで感じていたハルに対する違和感の原因はこれだったのだ。

そして、ふと考えた。

今のご時世、男性が男性を好きになることも女性が女性を好きになることも珍しくない。紗雪が今まで好きになったのは、たまたま異性だったけれど、彼女——否、彼の恋愛対象はやはり男性なのだろうか。

それを言葉にして問うことはなぜかできず、ぼんやりしていると、ハルに声をかけられる。

「——ユキちゃん？」

「あ、ごめんなさい。少し驚いちゃっただけなんです！ 私、すっかり女の人だと思つてましたよ。こんなにも綺麗な男性がいるなんて、神はずるい……」

「あらユキちゃんだつて可愛いのに」

「こんな姿を可愛いって言えるハルさんの目は腐っている気がします」

「まあ、言うわねー」

ハルはほろほろと笑う。

でも紗雪が言ったことは、本心だ。

隣に立つことに躊躇ためらいが生まれるくらい、ハルは美しい。

そんな紗雪の気持ちに気づくことなく、ハルが楽しそうに次のお店を指さす。

ハルが男性だということに衝撃を受けたものの、彼が女性であろうが男性であろうが紗雪にとって自分を救ってくれた唯一の人であることに変わりはない。

紗雪はハルの顔を改めて見つめたのだった。

散々買い物を楽しみ、二人は夕方前に一度マンションに戻った。

ハルは荷物を置いて、仕事に行くそうだ。

紗雪は彼を慌ただしくさせてしまったことに申し訳なきを感じつつも、久しぶりの楽しい時間に感謝した。自分の中に楽しいという感情が残っていたことが嬉しい。

部屋に入り、買ってきたばかりの服と靴を取り出して眺める。

こんなキラキラしたものが自分に似合うだろうかと一瞬不安になるが、モデルみたいに綺麗でファッションセンスの塊かたまりのようなハルが選んでくれたのだ。似合わないことはないはずだと自分を奮起させる。

そして、今日教えてもらったばかりの、彼の行きつけの美容院の予約を取った。

このボサボサでキューティクルなんて存在しない髪の毛をどうにかしたい。そうでなければこの洋服と靴にあまりにも不釣り合いだ。

今まで洋服も髪の毛も靴も、全て地味で目立たないものを選んで来た。規則があつたわけではないが、少しでもなにかを変えようと上司に文句を言われたのだ。

爪先にマニキュアを塗っただけでもあの騒ぎ。入社当初はきちんとしていた身なりは、どんどん

おろそかになっていった。

それに、美容院に行ったり洋服を買いに行ったりする暇や時間があるのなら、とにかく眠りたかった。眠らなければ、体力が回復せず苦しくなるだけだったから。

あの生活と縁が切れたんだと実感すると、いろいろなことがやりたくなる。

どこかに遊びに行きたいし、おしゃれをしてカフェにだって行きたい。他にも有名な洋菓子店や話題のパンケーキ屋にも行ってみたい。久しく会っていない、まだかすかに繋がっている友人たちにも会いに行きたい。会って、これまでの経緯を報告したい。

自分は好きなことをする時間を手に入れたのだ。

しばらくは好きなことを好きなようにやりつつ、ゆっくりと過ごしたかった。

まずは、目の前にある古びた洋服と靴の整理から始める。断捨離だんしゃりは今までの自分を一掃するいい機会だ。

着すぎて生地が薄くなったものや数年前に買ったものなど、紗雪は全てゴミ袋に入れていった。大学生の頃に買った花柄のワンピースは、デザインが若すぎて今の紗雪には着られない。数年間寒さをしのいでくれたマフラーともお別れをすることにする。

頭に浮かぶのは、優しくほほ笑むキラキラしたハルのこと。彼の隣に並んで不釣り合いな自分ではない。いたくない。

さすがに全てを捨ててしまうと不便なので、最低限のものだけを残して、それ以外の服は処分した。クローゼットの中が三分の一になる。

靴も同様だ。昔履いていた若い人向けの甘めのデザインのものは捨てることにした。

この数年で趣味が変わったわけではないが、こういう靴を履くには若さが足りないという気持ちが出てきてしまっている。年齢で分けているわけではなく、単純に今の自分には似合わないと感じるのだ。

それに、ハルが買ってくれた洋服や靴は、どちらかというと大人っぽいものだった。シックなデザインで、差し色をうまく使った上品なものが多い。

これからはそのテイストのものを集めてみたいと感じている。新しい自分に出会える気がするから。

明日は一日ゆっくりと部屋の片付けをして、洋服は明後日買いに行こう。午前中に美容院に行くので、ちょうどいい。

ハルにも一緒に来てもらいたいけれど、彼には仕事がある。彼の仕事はどうかやら不規則で、確実にいつが休みというのがないらしい。

勤めているネイルサロンは土日祝日が休みなわけではなくシフト制だという。ある程度自由がきくのか、予約の時間までは自由にできるし、予約が入らなければ休みにすることもあるらしい。

なんだかイメージしていたネイリストの働き方とは違うが、彼が嘘をついているようには見えなかった。

彼の部屋にはネイルやファッションの雑誌がところ狭しと置いてあり、専用の器具なども持っている。あれを個人の趣味で揃えているとは思えない。今日車で怒鳴っていた男性の言葉もあるので、

紗雪はハルの言葉を疑っていない。

だが、ハルについて、自分があまり知らないことに紗雪は気がついた。そもそもオネエだということも今日知ったばかりだ。どうやら彼は紗雪が気づいているのだと思い込んでいたようだが。

ハルについて考え始めると、眠れそうにない。聞けば教えてくれるだろうか。

紗雪はハルのことを知りたいと思っていた。とにかく、次はいつ会えるか聞いてみよう。

善は急げと、紗雪は早速、余裕がある日に一緒に買い物に行つてほしい旨をSNSで伝える。するとちょうどスマホを見ていたのか、ほとんど待たずに彼から返信があった。

「——明後日の午後三時からかあ」  
紗雪はすぐに了承の連絡をする。

その日は午前中に美容院に行く。雰囲気が変わった姿を見せられたらいい。彼女が鼻歌を歌いながら片付けを始めた直後、スマホが震える。どうやら元同僚からのようだ。

メッセージには、辞めたお祝いと今の会社の状況、課長が暴れているらしいが、どうにでもなることなどが書いてある。そして最後に紗雪に続いて辞めてみせるとあった。どうやって辞めたのかを教えてくださいとも添えられていたので、辞めた経緯を簡潔に返信する。

そこでスマホをベッドの上に放り投げ、シャワーを浴びて寝る支度をした。妙に目が冴えてしまったので眠れないかもしれないと思ったが、ベッドに潜ると自然と眠気が

やってきた。気がつけばスマホの目覚ましが鳴っていた。  
もう朝の九時近くだ。

紗雪は部屋の片付けの続きをしながら、穏やかに過ごす。

そして翌日、美容院に行く日になる。

紗雪はクローゼットの前で仁王立ちになっていた。

髪の毛を切ってからハルと一緒に買い物に行く予定なので、なにを着るか悩む。

一昨日おととい洋服をほとんど捨ててしまい、クローゼットには最低限のものしか入っていない。

悩みに悩んだ挙句、結局シンプルなシャツワンピースに厚手のカーディガンとコートを着る。足

元も久しぶりにパンプスを履いた。ハルが買ってくれた美しい靴だ。

綺麗なるものを身に着けると、やはり気分が高揚する。楽しい、嬉しいという気持ちが湧き上がってくるのだ。

麻痺していた感情が戻ってきているのがわかった。

思えばこの数年、楽しいや嬉しい、幸せなどといった感情を持ったことがなかった。嫌いなものと嫌なものばかりが増えていった。

自分の中にある感情が極端になっていって、嫌いかそれ以外しか残っていなかったのだ。

世の中には嫌いの他にも複数の気持ちが存在しているはずなのに。

それをゆっくり思い出しながら、もっと前向きになれる感情を増やしていけたらいい。

紗雪は足取り軽く美容院に向かった。

さすがハルが通っている美容院。そこは随分おしゃれなお店だった。

窓が大きく外から丸見えなのが気になるものの、明るく清潔感がある。

特に指名をせずに予約したのだが、担当してくれたのはハルがいつも指名している人だった。なんでも、ハルが、紗雪が予約したらよろしくと伝えてくれてくれたらしい。

「——にしても、髪の毛ブスだね」

「……あの、すみません」

「やりがいあるからいいけど！ どうする？ 一応カットの要望だよね」

「お任せします」

「染めてもいいの？」

「お……、お好きにどうぞ」

「自分がないというか、なんというか。最低限こうしてくれっていうのはないの？ 髪の毛の長さは長いほうがいいとか、お手入れの悩みとか」

「この数年髪の毛に時間を割く余裕がまったくなくて、やっと美容院に来られたんです。なので、今までの自分を一扫する感じがいいです」

「わかった。君の新しい門出を僕が手伝ってあげるよ」

鏡越しになつこりと笑った美容師が心強く感じる。

少し言葉がキツイが、優柔不断な紗雪にはちょうどいい。

けれど昔の自分には、もっとこうしたい、こうなりたい、という確固たるイメージがあったよう